

鶴岡市（山形県）における人とカキとの関わりに関する事例的考察

平 智・川村道子
山形大学農学部 997-8555 鶴岡市若葉町1-23

A Case Study of the Relationships of People to Persimmon in Tsuruoka City (Yamagata Prefecture)

Satoshi TAIRA And Michiko KAWAMURA

Faculty of Agriculture, Yamagata University, Tsuruoka, Yamagata 997-8555

Summary

To study the relationships of people to persimmon in Tsuruoka City, the distribution of persimmon trees in the former city area (16 km²) was assessed and the relations between people and persimmon trees were also surveyed. We found 5,460 persimmon trees in the area studied and most were cultivar 'Hiratanenashi'. In garden yards, 64% of persimmon trees were pruned and the others were not. By interviewing 48 people who live in that area, it was found that the closeness of relationships between people and persimmon trees or fruit has gradually declined in recent years. Based on these results, the future of the relationship between people and nearby plants like persimmon was discussed.

Key Words: fruit tree, people plant relationships, persimmon, Tsuruoka City

はじめに

カキは日本人にとって最も身近な果樹の一つで、庭先果樹として一般的であるばかりでなく、畦畔や里山などにも広く分布が認められる（今井，1990；傍島，1980）。最近では、晩秋になっても色づいた果実が収穫されないまま放置されているカキの木を見かけることも少なくない。これは、人とカキとの長くて豊かな関係性（今井，1990）の稀薄化を意味しているのだろうか。

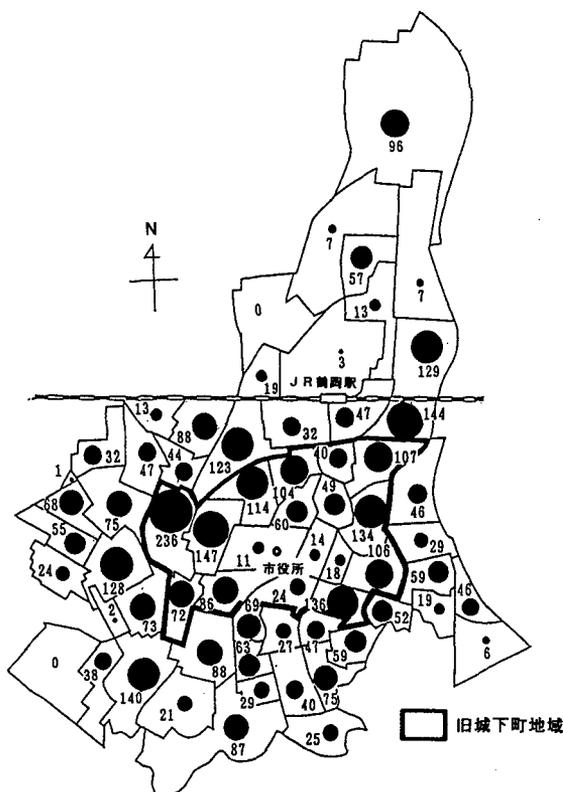
「庄内柿」とも呼ばれる渋ガキ‘平核無’の代表的な生産地の一つである山形県鶴岡市では、ケヤキとともにカキ（庄内柿）が市の木に指定されている。旧庄内藩の士族であった酒井調良が農業振興のためにきわめて熱心に普及したという歴史的な経緯（平，1995）もあって、同市内には現在もかなり多数のカキの木が分布している。本報告では、鶴岡市に暮らす人々とカキとの関わりの実態とその変化を明らかにする手始めとして、まず同市内のカキの木の分布状況を調査した。さらに、せん定などの管理作業の有無に注目しながら、人とカキをはじめとする身近な植物との関わりについて考察を加えた。

調査方法

1. カキの木の分布調査

現在の鶴岡市（面積約 234km²）のうち、とくにカキ

の木の分布が多い旧市内地域（1955年に行われた町村合併以前の市内地域、面積約16km²、第1図）を、1998年



第1図. 鶴岡市旧市内地域に庭先果樹として分布するカキの本数.

数字は町または大字ごとのカキの樹体数を示す。
円の大きさは本数に比例させてある。

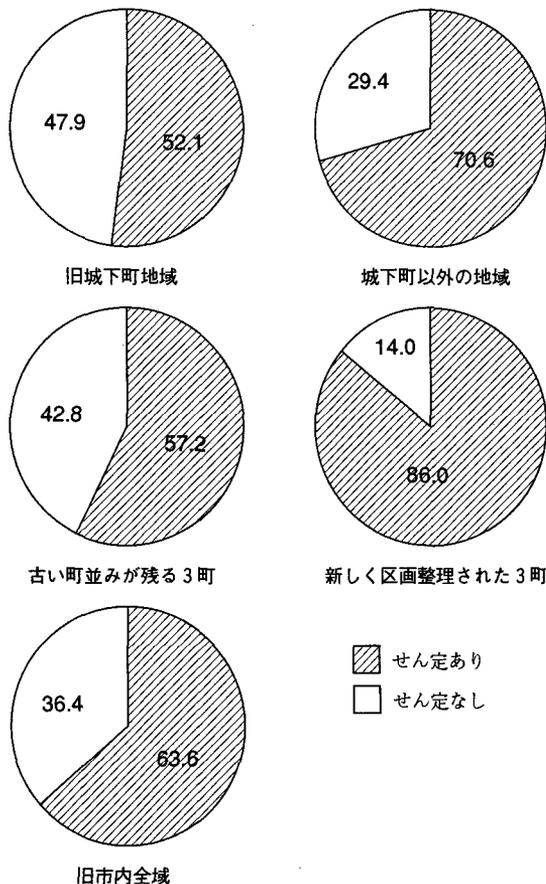
の4月から7月にかけて徒歩または自転車で踏査してカキの木の分布状況を調査した。

調査にあたっては、カキの木の木数（品種の区別はしていない）と住宅敷地内での位置（玄関前、庭、駐車場の脇および家の裏に分類。庭は玄関前の前庭を除く中庭を意味する。敷地内の駐車スペースのすぐ脇にあるときに駐車場の脇とした）およびせん定作業の有無（程度や方法にはこだわらず、ここ1年以内にせん定を行った形跡があるかどうか）をチェックした。

なお、本報告ではカキの木が住宅の敷地内にある場合を「庭先果樹」と呼び、畑地（果樹園）や神社あるいは学校の敷地内にある場合は「その他」として区別することにした。

2. 人とカキとの関わりに関する聞き取り調査

調査の際に出会った住民48人に対しては、自宅にあるカキの木の管理方法や果実の利用方法について質問した。調査の対象者は旧市内地域のうちの22町の住民で、1町あたりの聞き取り件数は1～6件であった。



第2図. 鶴岡市旧市内地域に庭先果樹として分布するカキのせん定の有無。

各地域の全樹体数に占めるせん定樹および放任樹の割合(%)を示す。旧城下町地域については第1図参照のこと。古い町並みが残る3町は旧市内中心部の家中新町、宝町および鳥居町を、新しく区画整理された3町は旧市内周辺部の伊勢原町、大部町および道田町を指す。

調査結果と考察

1. カキの木の分布

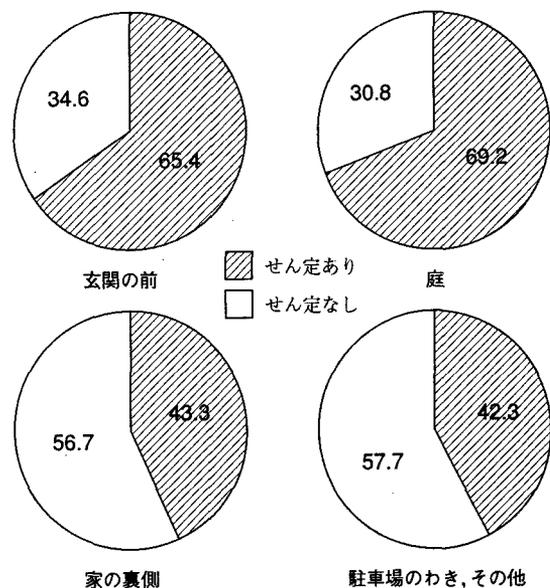
調査を行った鶴岡市旧市内地域内に、庭先果樹として3850本、畑地（果樹園）に約1500本、寺や神社および学校の敷地内に110本の合計約5460本のカキの木が確認された（第1図）。調査地域1km²当たり換算すると、約340本分布していることになる。

庭先果樹として存在するカキの木の約38%は旧城下町地域（大瀬（1985）を拠りどころにして推定した鶴ヶ岡城跡を中心とした17町で、第1図の太線に囲まれた部分で調査区域の約25%にあたる。面積約4km²）に分布し、人口100人当たり換算すると8.8本で、それ以外の地域の5.2本に比べて多かった。

なお、調査地域内にあるカキのほとんどは‘平核無’であると判断されたが、それ以外の品種と推定されたものについては同定できない場合が多かった。

庭先にあるカキでせん定されている木は全体の約64%であった。古い町並みの残る地域よりむしろ新しく区画整理された地域の方でせん定されている割合が高かった（第2図）。これは、前者で住民の高齢化が進行して、せん定などの管理作業が滞りがちであることを示しているのかもしれない。

一方、住宅の敷地内でのカキの木の位置は、①庭、②家の裏、③駐車場のわき、④玄関前の順に多かった。そのうちせん定されている割合は庭と玄関前にある木で高かった（第3図）。カキの木は無せん定で放置するとかなり繁茂するので、これらの位置にあるカキの木は庭園木としての認識が高いためせん定によって手入れされ



第3図. 鶴岡市旧市内地域に庭先果樹として分布するカキの屋敷内の位置別に見たせん定の有無。

4つの位置別の全樹体数に占める割合(%)を示す。

第1表. 鶴岡市旧市内地域における庭先果樹としてのカキに各種の手入れを行っている世帯の割合(聞き取り調査の結果による).

	せん定	薬剤散布	施肥	摘蕾・摘果
手入れの有無				
行っている	44(91.7)	35(72.9)	18(37.5)	11(22.9)
行っていない	4(8.3)	13(27.1)	30(62.5)	37(77.1)
計	48	48	48	48
手入れの方法				
家人で行う	30(68.2)	14(40.0)	15(83.8)	11(100.0)
業者や農家にたのむ	14(31.8)	21(60.0)	3(16.2)	0
計	44	35	18	11

表中の数字は世帯数, ()は全体に占める割合(%)を示す.

る割合が高いものと推測される.

鶴岡市旧市内地域には今もなお多くのカキの木が現存する. このことから, 毎年安定した量の果実を得るためにせん定するなど住民とカキとの密接な関係が, 他の都市に比べて古くからより強く継承されていることが期待される. しかし, 実際にはかなり多数の木が半放任状態になっていた. なお, 一部の新興住宅地域では果実生産用というより, 単に庭園木の一種として植栽されているケースもあるのではないかと推察された.

2. 人とカキとの関わり

聞き取り調査の結果から, 調査地域内には以前はもっと多くのカキの木があったが, ここ20~30年の間に相当数が伐採されてしまったことがわかった.

せん定は90%の家, 薬剤散布はほとんどの家で行っていたが, 摘蕾や摘果など果実の品質をより向上させるための管理作業は約20%しか行われていなかった.

また, せん定や施肥は家人で行う場合が多いが, 薬剤散布を含めてこれらの作業を業者や知人の農家などに頼んで行ってもらっているケースもかなり認められた(第1表).

48人のうち2人は秋になっても果実を収穫しないと回答したが, ほとんどの人は収穫した果実を自ら脱渋(アルコール脱渋)するか干し柿にして, 自家用とするか知人に贈るとのことで, 漬物への果実や果皮の利用や若葉の利用(柿の葉茶)などはほとんど行わなくなったとの回答であった.

これらの事実は, 先にも報告したように(平, 1999; 平・玉木, 2002), カキの伝統的な脱渋法や多面的利用法が, 鶴岡でも他の地域と同様に衰退してきていることを示している. 同市内にカキの木が多数存在する歴史的な経緯や市の木にも指定されている背景を考えれば, 市

民とカキとの長く豊かな関わりをどのように記録(あるいは記憶)にとどめ, どう引き継いでいくかという新たな課題に取り組まなければならない時がきているといえよう.

おわりに

著者が以前青森県弘前市と山形県鶴岡市の市民を対象にして行ったアンケート調査の結果によれば, カキは, 現在も世代を越えて, 日本の秋を代表するものとして広く認識されている(平, 2001). この認識は, 私たちとカキとの長く豊かな関わりあいのなかで培われてきた果物観あるいは自然観であるといえる.

しかし, 今回の調査結果から推察されるように, 近年になってこのような人とカキとの親密な関係性は急速に衰退してきている. 両者の間に育まれてきた歴史のある豊かな関わりあいを継承しつつ, さらに発展させていくためには, 最近小中学校において拡充が推進されている「総合的な学習」のテーマとして取り上げるなど新たな視点に立った方策が必要になってきていると考えられる.

謝 辞

本調査は, 1998年当時研究室の専攻学生であった大概真子, 牧 篤史両氏の協力のもとに実施しました. 記して感謝の意を表します.

引用文献

- 今井敬潤. 1990. 柿の民族誌. p.7-82. 現代創造社. 大阪.
- 大瀬欽哉. 1985. 城下町鶴岡. p.29-39. 庄内歴史調査会. 山形.
- 傍島善次. 1980. 柿と人生. 明玄書房. 東京.
- 平 智. 1995. 山形県庄内地方におけるカキ「平核無」の産地脱渋の取組み. 農業および園芸70:1295-1299.
- 平 智. 1999. 伝統的食文化としてのカキ(柿)の多面的利用に関する調査研究. 浦上財団研究報告書 7:1-17.
- 平 智. 2001. 鶴岡(山形県)と弘前(青森県)における市民の果物観の比較調査—カキに対する意識を中心に—. 人間・植物関係学会雑誌 1(1): 6-9.
- 平 智・玉木聡一. 2002. 東北地方における渋ガキの伝統的な脱渋法と利用法の事例. 人間・植物関係学会雑誌 1(2): 26-28.